

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 12 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370263

研究課題名(和文) 晩年のマーク・トウェイン 新版『自伝』(2010)に見る著者の歴史意識

研究課題名(英文) Mark Twain's Last Years: The Uncensored Autobiography Published in 2010.

## 研究代表者

井川 真砂 (IGAWA, MASAGO)

東北大学・国際文化研究科・名誉教授

研究者番号：30104730

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、トウェイン没後100年にしてようやく出版された無削除新版『自伝』(2010)をとりあげ、その<語り>の特徴である「現在」と「過去」を往来する口述の「現在」に焦点を当てることによって、1906年における著者の活発な社会批評を分析した。トウェインは、この地球上(フィリピン、コンゴ、ロシア他)における残虐行為を厳しく批判する。

その立ち位置や歴史意識は悲観的なものだとは言い難く、むしろ能動的で力強い革新的な意識として浮上する。そうした内実を明らかにすることによって、トウェイン研究史上これまで相対的に看過されてきた晩年期の再構築に貢献することを目指した。

研究成果の概要(英文)：This project focuses on a relatively neglected period in Mark Twain's life and work, and specifically on the period in his last years when he dictated his Autobiography to a stenographer, Josephine S. Hobby. The Autobiography of Mark Twain, the uncensored edition, was newly published; Volume 1 in 2010 after a hundred years of his death (Volume 2 in 2013, and Volume 3 in 2015). I analyze his social criticism mainly in Volume 1 where he bitterly criticizes atrocities perpetrated in this world, such as in the Philippines, Congo, and Russia in 1906, when he dictated to the stenographer. Complex as his last years might be, the picture I draw here might help readers to see a Mark Twain who is still quite active and positive, and not necessarily pessimistic over the future of the world history. I aim to reconstruct popular pictures of his last years.

研究分野：人文学

キーワード：マーク・トウェイン 晩年のマーク・トウェイン 『マーク・トウェイン自伝』 自伝文学 老い・老境 19-20世紀転換期 植民地主義 反帝国主義

### 1. 研究開始当初の背景

(1) マーク・トウェイン研究史において、晩年期はこれまで相対的に看過されてきた。その結果、<晩年のトウェイン>像には「自信喪失」、「厭世的な悲観主義」、「虚無思想」といった言葉が長らく付きまとってきた。世紀転換期に人生の晩年を迎えたトウェインが世界を取り巻く政治的社会的状況に「憤る」姿は、一部伝えられはしても部分的にすぎず、複雑なその晩年像は没後もなお十分捉えきれない状況にあった。

(2) そうした研究状況打開の基盤となったのは、なんとといっても1960年代後半に始まるマーク・トウェイン・ペーパーズ&プロジェクト(カリフォルニア大学バンクロフト図書館)による膨大な未公開資料の編集・出版活動、ならびに原資料閲覧公開方針に負うところが大きいと言っても過言ではあるまい。この活動によってトウェイン研究者は誰でも著者晩年の執筆活動をより直接的に知りうる状況が生まれたのであり、晩年期の研究に門戸が開かれたと言えよう。とはいえその研究の進展はゆるやかな経過をたどった。

(3) ようやく最近になって、トウェイン晩年期への実質的な研究関心が向けられるようになり、単発的ないくつかの個別研究を経て、雑誌論文の特集号や、学会におけるシンポジウム、およびその成果報告論集が出版され始めた。その中でも「世紀転換期のトウェイン」を特集した *Arizona Quarterly* (spring 2005) 誌中の諸論文は注目に値する。

(4) こうした経緯を振り返れば、トウェイン没後100年にして著者の意図どおりに出版された無削除新版『マーク・トウェイン自伝』(2010)の意義はきわめて大きいと言わねばならない。本『自伝』の編集・出版事業もまたマーク・トウェイン・ペーパーズ&プロジェクト(以下MTP&Pと略記する)による長年の集団的編集活動の成果である。本研究計画応募時には、まだその第1巻のみが出版された段階だった。(その後、第2巻が2013年に、第3巻が2015年に出版され、現在、全3巻の出版事業が完了している。)第1巻の内容を紐解くだけでも、本『自伝』は、著者が晩年にもっとも力を入れた意欲的な著述であるばかりか、晩年の重要な著作であることが十分予感される状況にはあったと言える。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、トウェイン没後100年にしてようやく出版された無削除新版『自伝』(2010)をとりあげ、この最晩年の著作の分析をとおして、これまで相対的に看過されてきたトウェイン晩年期の再検討・再構築に貢献することを目的とする、

(2) そのために、既刊『自伝』(4種類の版)と対比して、本『自伝』本来の姿はどこに求められるのか、まずはその概括的な把握に努め、本『自伝』のために編みだされたトウェイン独自の執筆方法を理解する。

(3) 本研究が具体的に進める作業は、トウェイン独自の執筆方法による「語り」の特徴に注目し、「現在」(=diary)と「過去」(=history)を往来する口述の「現在」に焦点を当て、1906年に彼が口述した社会批評を分析する。それによって、トウェインの立ち位置や歴史意識を考察する。

### 3. 研究の方法

(1) 第1巻だけでも736頁もある大部の著書であるが、なによりもまずはテキストの精読を通して『自伝』内容の緻密な読解を進める。その際、既刊『自伝』(4種類の版)との比較によって、既刊『自伝』の歪みの特徴を把握する。歪みを解かれた『自伝』本来の姿が如何なるものであるかを理解する。

(2) 本『自伝』にとって肝要な「語り」の特徴を理解し、「現在」と「過去」を往来するその「語り」が生み出す独自の効果を確認しながら読解を進める。口述によるこの「語り」方こそは、トウェインが試行錯誤の自伝執筆準備の中でようやく見出し、編み出した方法である。

(3) 具体的な研究方法としては、口述の「現在」に焦点を当てることによって、1906年(=「現在」)に著者が口述した社会批評(主に第1巻)を分析することである。

(4) 亀井俊介と読む『マーク・トウェイン自伝』読書会(2011年春にスタートし、現在20例会を重ねて継続中)の報告や討議に参加しながらテキストの読みを深める。

(5) 以下に主な参考文献を記す。

#### <Primary Sources>

DeVoto, Bernard, ed. *Mark Twain in Eruption: Hitherto Unpublished Pages about Men and Events*. New York: Capricorn Books, 1940. Print.

Griffin, Benjamin, et al., eds. *Autobiography of Mark Twain*, Vol.2. Berkeley: U of California P, 2013. Print.

Griffin, Benjamin, et al., eds. *Autobiography of Mark Twain*, Vol.3. Berkeley: U of California P, 2015. Print.

Kiskis, Michael J., ed. *Mark Twain's Own Autobiography: The Chapters from the North American Review*. Madison: U of Wisconsin P, 1990. Print.

Neider, Charles, ed. *The Autobiography of Mark Twain*. New York: Harper, 1959. Print.

Paine, Albert Bigelow, ed. *Mark Twain's Autobiography*, 2vols. New York: Harper, 1924. Print.

Smith, Harriet Elinor, et al., ed. *Autobiography of Mark Twain*, Vol.1. Berkeley: U of California P, 2010. Print.

#### <Secondary Sources>

Drabelle, Dennis. "Final Volume Shows Why Twain Wanted 'Autobiography' Kept under Wraps." *Washington Post*.

- October 21, 2015. Web. 15 Nov. 2015.  
 Rohter, Larry. "Dead for a Century, Twain Says What He Really Meant." *The New York Times*. July 10, 2010. *nytimes.com*. Web. 15 Nov. 2015.  
 亀井俊介、システムにこだわらない自由な「語り」の魅力、『週刊読書人』、第3028号、2014年2月21日、5。  
 里内克己、Harriet Elinor Smith, et al., eds. *Autobiography of Mark Twain*, Vol.1. 『英文学研究』、第89巻、2012年12月、89-94。  
 『マーク・トゥエイン研究と批評』、第11号、特集 アメリカ文学と自伝、南雲堂、2012年、9-73。

#### 4. 研究成果

本研究によって、以下の7項目を確認するとともに、『自伝』中、1906年の口述におけるトゥエインの社会批評を分析し、第4項の結論を得た。

##### (1) 本『自伝』出版事業の大きな意義

MTP&Pにおける本『自伝』編集・出版事業のそもそもの始まりは、『自伝』原稿(タイプスクリプト)が未完どころか<完結している事実の発見>にあった。『自伝』原稿は未完」といった前提(ないしは通説)が長きにわたり支配的だったことに加え、膨大なタイプスクリプトが4種類存在する謎と、資料に付された煩瑣なメモ(既刊『自伝』編集者たちが作業上の便利のために記す)活用資料使用後の未整理と混乱等々の理由により、本来の『自伝』原稿を正確に判断することや、それを編集することが困難な状態だった。ここに至るまでのその経過を知れば、MTP&Pの専門家集団による編集活動歴40年の蓄積なしにこの事実の発見は困難だったと考えられる。それゆえ、本出版事業それ自体がトゥエイン研究史上の大きな成果だと指摘できよう。晩年期の研究にとって意義深いのは言うまでもない。

##### (2) 既刊『自伝』のゆがみ

既刊『自伝』4種類とは、出版順に  
 Paine, Albert Bigelow, ed. *Mark Twain's Autobiography*, 2vols, 1924;  
 DeVoto, Bernard, ed. *Mark Twain in Eruption: Hitherto Unpublished Pages about Men and Events*, 1940;  
 Neider, Charles, ed. *The Autobiography of Mark Twain*, 1959; and  
 Kiskis, Michael J., ed. *Mark Twain's Own Autobiography: Chapters from the North American Review*, 1990 である。各編者がいずれも独自の方針をとる上記既刊4『自伝』は、無削除新版『自伝』をていねいに読んだ者にとっては、いずれも著者の意向をかなり大きく歪めた編集本であるとの思いを抱かざるを得ない。

まずはペイン版：ペインは、トゥエインの

オリジナル『自伝』口述過程に大きく貢献し、かつまた<トゥエインの伝記作家>として公認された人物ではあるが、彼の編集は、かつて『不思議な少年』を編集した時同様に、そのヴィクトリア朝的価値観から、またカトリックの立場から、やはり大幅に原稿を削除しているし、『自伝』後半部の大半を未収録である。ついでデヴォート版：ペイン版が削除した<憤るトゥエイン>の姿を復活させている点での長所は大きい。しかし『自伝』全体の抄録にすぎぬことから、この版に依るだけでは晩年のトゥエインが厭世家になったと受けとめられかねぬ危険性を孕む。そしてナイダー版：ひろく流布した編年体の読みやすい編集であるため一見したところ大きな問題は無さそうに見えるものの、じつはもっとも大幅な手が加えられ、原稿のカット&ペーストの頻度は最多である。それによってトゥエインの口述における時間の流れは寸断され、もっとも大切な<語り>の魅力が大きく損なわれているために、決定的なゆがみだといえよう。誇張がオーバーすぎると判断すれば、ユーモアまでもが削除対象になる。最後にキスキス版：『ノースアメリカン・レビュー』誌にトゥエインの同意を得て、同誌のジョージ・ハーヴェイ(George Harvey)が編集掲載した抄録をまとめたもの。著者の同意があるものの、抄録ゆえにキスキス自身も無削除版『自伝』の出版を切望している。

以上のとおり、既刊『自伝』からは、残念ながら、晩年のトゥエインの本来の姿を理解するのは困難だと言えよう。

##### (3) これぞわが自伝執筆のやり方

トゥエインが最終的に編み出した自伝執筆の方法とは、「現在」(=diary)と「過去」(=history)を自在に往来する<語り>の導入である。その手ごたえを『自伝』中(1906年1月16日)でこう述べている。「何度も何度も実験を繰り返し、ついに私は自伝を紡ぐのにふさわしいやり方を間違いなく見出した」(283)。日々取り組む『自伝』執筆は、その日の日記を口述することからいつも始めたい、つまりいま「心に浮かぶいちばん大事なこと」、そしてもっとも新鮮なことを何よりも語りたいからである。現在のフレッシュなその思考がもし脱線していつの間にか回想の海へ漂っていくとしても、それは過去の類似の思考と繋がる所為であり、そのとき、大きくかけ離れたように見える二つの思考が対照され、そこに楽しい驚きが生まれるだろう。それが歴史になる。その日いちばんの関心事から始まる口述「日記」(=diary)とそこから生まれる「歴史」(=history)を兼ね備えたものが私の『自伝』である。このやり方なら、いつも新鮮な感覚で語ることができるし、それは100年後に読む人にとっても新鮮で、親しみやすいものになるだろう。

この方法が可能になったのは、ペインが紹介した有能な速記者兼タイプストのジョセフィン・S・ホビー(Josephine S. Hobby)

との出会いによる。そしてまた、彼女はよき聴き手でもあった。トウェインの話が可笑ければよく笑い、尋ねたいときには質問もした。口述は週に4、5日、毎朝11時ごろから2時間ばかりがそれにあてられた。別のやり方として、じつは、トウェインは発明されたばかりのエジソンの蓄音機を発注して口述録音を試してみたが、それは失敗だと直ぐに悟った。機械を相手の口述は苦痛だったのである。

#### (4) トウェインの批評精神の能動性

本『自伝』の「語り」の特徴である「現在」と「過去」を往来する口述の現在における著者の批評精神は、1906年の「今日」の世界の出来事に旺盛な関心を示す能動性の表れだと言えよう。ここに表明される社会批評の具体例(たとえば、ベルギー王のコンゴ植民地支配を暴く執筆活動やアメリカ海軍によるフィリピン・モロ族大虐殺への痛烈な批判、ロシア帝政による民衆支配の苛酷さへの憤りとロシア革命支持表明、またヘレン・ケラーの依頼に応じて視覚障害者を支援する社会改革活動への協力他)を示し、そうした活動を支える著者の積極的な批評精神を明らかにした。トウェイン晩年のこうした活動的な姿は、これまで一般的に伝えられてきた晩年像とは相いれない。ここに見るのは能動的で積極的な円熟した老作家の姿である。

#### (5) いま心に浮かぶいちばん大事なこと

スペイン・モロ族大虐殺事件が起こった時には、その事件にいちばん関心があり、佳境にあった話(60年前の学校友達の話)を一時中断してまでも、いまいちばんの関心事について話す。また、1906年2月1日には、いま「心に浮かぶいちばん大事なこと」として、「明日、私たちの結婚36周年を迎える。妻は1年4か月前に、イタリアはフローレンスにて、この世を去った。22か月におよぶ闘病後のことである」(320)と語り始める。象牙のミニアチュアでその乙女姿を見せられたクエーカー・シティー号上での出来事から、初めて出会った22歳の彼女、そしてエルマイラでの結婚式等々、いつまでも純真だった妻の生涯を愛情をこめて振り返る。また別の日には、今は亡き娘スージーが書き遺した『トウェイン伝』をたっぴり引用し、家族を語り自分を語る。どのような父であり夫であったかを、いく分戯画化して描写する。そうした「過去」がいずれも凝縮されて「現在」に生きており、トウェインはそのような日々を過ごしていたと思われる。一見とりとめもなく展開するこうした「語り」には、いつもその時々話題やテーマとの緩やかな繋がりがあり、晩年の思索と織りあわされて一定のまとまりをもつ話になって展開するのである。

日々の口述は家族のことだけではない。トウェインが関わり合った大切な人びとや友人たちに言及する場合も同様に、そのかけがえのない一人一人の生涯が温かいまなざしで捉えられ、スケッチされる。トウェインの結婚式の当日から36年間一家に仕えてくれ

た勤勉な御者パトリックの葬儀に出席し、棺に付き添うトウェインは、パトリックが何事であれじつに用意周到な働き者だったその仕事ぶりや家族思いだった彼の生涯を、パトリック伝として本『自伝』中に挿入する。ごく普通の人びとのコンパクトな伝記が愛情をこめて数多く描かれる。一方、はば広い交友関係には有名人との出会いも多い。本『自伝』にはトウェインの生きた時代の人びとの暮らしや時代精神が息づいている。トウェインが生きた19世紀半から20世紀初頭のアメリカ史が、人びとの暮らしと共に伝えられる。

#### (6) 晩年の思索書でもある本『自伝』

トウェインの「心に浮かぶいちばん大事なこと」が、聖書に中の神や本物の神、天国や地獄についての真摯な思索の場合がある。つまりはトウェイン晩年の思索が展開するのである。そこでは、神や人間や地球上の生命が、宇宙空間の中において捉えられる。地球は太陽系の中の一惑星であり、地球も人間も相対的にきわめて小さな存在であると認識される。人間の歴史の時間軸だけでなく、宇宙空間という広大なひろがりの中で人類の歴史を捉え、未来を展望する、本書はトウェイン晩年の思索書の側面を持つ。

そうした認識において、トウェインの執筆意欲やその姿勢を考察するのは大変興味深いことである。彼は、ヘンリー・ロジャーズ(Henry Rogers)の勧めに従い、より大衆的なS・S・マクルーア通信社との出版交渉を止めたはずなのに、マクルーアとも会い、彼の『自伝』原稿を見せてその反応を知りたがる。より広い読者大衆の反応を真剣に知ろうとするトウェインの欲求は何ゆえか。ハーパー社との多額の独占契約を済ませているので、金銭的問題を理由にするだけではその説明はつかないだろう。それ以外に何かもっと大事な理由があるのだろうか。自分の書いたものは広く大衆に理解してもらいたいし、理解してもらえる、大勢の人々をきっと楽しませることができ、だから読者の反応を知りたい、といったもっと真摯な希求ではなからうか。ひいては文壇にその事実を突き付けたい

真の文学とは如何なるものか、既存の価値基準を改める必要はないのか、そうした点における『自伝』への自負が無かったと言えようか。最晩年においてトウェインが示す文学に寄せる熱い情熱に脱帽する思いである。最晩年まで執筆活動を続け、思索し、社会的批評活動をやめず、たえず能動的に生きた大いなる作家。死を意識しながらも、その死を宇宙空間において、地球という惑星に住む一人の人間の死として認識していたと考えられる。

#### (7) 本『自伝』は著者晩年の重要な著作

「5年にわたる最初の集中的な難業」(Griffin, Acknowledgments, Vol.3, xvii)の編集作業を経て、ついに2010年に第1巻が出版され、昨秋2015年には最終第3巻が刊行されたことによって、10年余に及ぶ集团的

編集活動は完結した。本『自伝』は著者晩年の重要な著作であることがいよいよ明瞭になってきたように思われる。膨大な本『自伝』全3巻のその約半分は、既刊『自伝』の未収録分を補う内容になっている (Robert H. Hirst, *New York Times*, July 10, 2010)。本『自伝』が「決定版」と呼ばれる所以である。本書の意義については今後もさらに論議されるに相違なからう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

井川真砂、『マーク・トウェイン自伝』(2010)に見る著者晩年の批評精神、『NEW PERSPECTIVE』(新英米文学研究) 査読有、第47巻2号(秋/冬) 総号204号、2017年2月発行予定。

井川真砂、トウェインのほら話 セシル・ローズが釣ったサメ、『マーク・トウェイン研究と批評』、査読有、第15号、南雲堂、2016年、75-77。

井川真砂、トウェインの「ディケンズ評」二編を読む、『マーク・トウェイン研究と批評』、査読有、第14号、特集：ディケンズとトウェイン、南雲堂、2015年、19-28。

IGAWA Masago, Mark Twain's "Knights of the Tiller": The American Labor Movement of the 1880s in *Life on the Mississippi. Mark Twain Studies* 4 (2014): 20-39. 査読有。

井川真砂、晩年のマーク・トウェイン—*Following the Equator* (1897) にみる反帝国主義の修辞学、『第85回大会 Proceedings: The 85th General Meeting of the English Literary Society of Japan, 25-26 May 2013』、査読有、日本英文学会(2013.9) 17-18。

[学会発表](計5件)

井川真砂、『晩年のマーク・トウェイン—新版『自伝』(2010)を読む』新英米文学会第47回大会、名寄市立大学、2016年8月25-26日(予定)。

井川真砂、『とびきり上等』だったミシシッピ川の蒸気船 トウェインのディケンズ評、「ディケンズとトウェイン 交流する二人の作家」ディケンズ・フェロウシップ日本支部&日本マーク・トウェイン協会合同大会、基調講演(ディケンズ・フェロウシップからは佐々木徹支部長が基調講演) 明治大学駿河台キャンパス・リバティータワー、2014年6月21日。

Igawa, Masago.

"Mark Twain and the 'knights of the tiller': A Group of River Pilots in *Life on*

*the Mississippi*" (Presentation) at the panel of "Mark Twain: The View from Japan." Panel Chair: Victor Fischer, on Oct.10. The 48th Western Literature Association, Berkeley, California (October 9-12, 2013).

Igawa, Masago.

Mark Twain and the "knights of the tiller": The Influence of the American Labor Movement of the 1880s'. *Proceedings of Elmira 2013, The Seventh International Conference on the States of Mark Twain Studies: One Man, Many Legacies*. Elmira: Elmira College Center for Mark Twain Studies, 38-39.

井川真砂、『晩年のマーク・トウェイン *Following the Equator* (1897) にみる反帝国主義の修辞学』日本英文学会第85回大会 招待発表、2013年5月25-26日、東北大学川内キャンパス。

[図書](計1件)

平成28年度科学研究費学術図書出版助成内定。アメ労編集委員会編著、『アメリカ文学と革命』(共編著) 英宝社、2016年(11月出版予定) 所収論文 井川真砂、コネティカット・ヤンキーとトウェインの「革命願望」。

[その他](計4件)

井川真砂、マーク・トウェインと南北戦争—「従軍失敗談」、平成26年度栗原公民館主催講座「アメリカ文学に見る戦争と人間」、新座市、2月24日。

井川真砂、『とびきり上等』だったミシシッピ川の蒸気船 トウェインのディケンズ評、『年報』第37号、ディケンズ・フェロウシップ日本支部、2014年11月、82-83

井川真砂、マーク・トウェイン 『赤道に沿って』第13章、平成25年度栗原公民館主催講座『アメリカ文学に見る民衆と個人』、新座市、2月18日。

Igawa, Masago.

Mark Twain and the "knights of the tiller": The Influence of the American Labor Movement of the 1880s'. *Proceedings of Elmira 2013, The Seventh International Conference on the States of Mark Twain Studies: One Man, Many Legacies*. Elmira: Elmira College Center for Mark Twain Studies, 38-39. August 2013.

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

井川 真砂 (IGAWA, MASAGO)

東北大学・大学院国際文化研究科・名誉教授

研究者番号：30104730